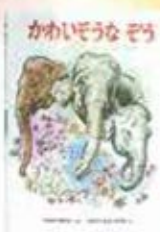
メディアでも多数とりあげられました！

「金の船・金の星 子どもの本の100年展」

一緒に泣いて 一緒に笑おう

「かわいそうなぞう」「ガラスのうさぎ」……。誰もが一度は手にした児童書の世界。「みる よむ あそぶ 金の船・金の星 子どもの本の100年展」を19日から、東京・上野の森美術館で開催する。1919（大正8）年、童謡童話雑誌「金の船」（後に「金の星」と改題）の刊行でスタートした金の星社の創業100周年記念。人気作家のイベントなどもりだくさんの内容で、親子の笑顔を未来へとつなぐ。【三枝泰一】



児童文化けん引

金の星社の創業は「大正デモクラシー」の時代。自由主義の風が吹き、豊かな市民文化が文芸の世界に浸透した。

童謡童話雑誌「金の船」は、創業者の斎藤佐次郎が見いだした童謡詩人・野口雨情を初代編集長に、鹿島鳴秋、西条八十らの協力で創刊。表紙絵は蕗谷虹児が描いた。「子どもらしさ」の重要性がうたわれた。

創業翌年には、子殺し時代の水谷八重子をヒルチル役に、児童劇「青い鳥」を初めて上演。また同年、童謡作曲家でピアニストの本居長世と長女みどりの歌唱による童謡音楽会を開催し、ともに大成功を収めた。

雨情と長世のコンビは長く続き、「七つの子」「十五夜お月さん」など多くの童謡を発表。みどりは童謡歌手第1号として、初めてレコードに童謡を吹き込んだことで知られる。

「児童文化」のまさにけん引役だった。

せんろはつづく

悩みに寄り添い

戦前・戦中の軍国主義は児童文化を窒息させるものしかなかった。（斎藤健司社長）という戦後の社業を支えたのは、さまざまな社会問題とその中で悩み成長していく子どもたちに寄り添う姿勢だ。

戦時下、動物園で殺処分されたゾウの実話を題材にした「かわいそうなぞう」（197万部）、広島原爆の惨状を訴えた「おこりじぞう」（24万部）、空襲で肉親を奪われた少女を描いた「ガラスのうさぎ」（240万部）。ベストセラーは、将来に向けて読み継がれていくに違いない。

近年では、東日本大震災で失われた命をテーマにした「ハナミズキのみち」や「かぜのでんわ」が、全国の人々の心を被災地につないだ。

「金の星」斎藤健司社長に聞く

子どもたちと価値観を共有

斎藤健司社長（53）に「金の星社」の社業を聞いた。

――「金の星社」の仕事は100年続きました。

雑誌「金の船」が世に出た大正は、子どもの文化が花開こうとしていた時代です。そうそうたる人たちが編集に携わっていましたが、読者の皆さんから投稿を募る親しみやすさもありました。児童雑誌としては「赤い鳥」が1年前に創刊されていましたが、「金の船」は庶民色をうたうことで、独自性を出していたようです。

童話劇や童謡音楽会の開催など、読者を集めてつながりを広めようという取り組みにも積極的でした。「読者本位」の姿勢は、今に引き継がれている財産だと思います。

――出版不況と言われて久しい状況が続いています。

少子化による児童書市場の縮小は父が先代社長の時代から既に進んでいましたが、2000年の「子ども読書年」からは「読み聞かせ」などの読書推進活動が広がり、環境は変わりました。児童書のジャンルは「右肩下がり」にはなっていません。

一方で、「読み聞かせ」で育った子どもたちが大人になってからも、本との関係は続いているのか。

東京都台東区の金の星社で、斎藤健司社長

続けさせていくにはどうすればよいのか。20年近くたった今の課題です。

――電子化の時代を迎えています。

児童書は絵本や図鑑で大きな挿絵を使った作品が多いため、電子書籍リーダーになじまないという問題があります。絵本の場合、紙の質感は大きな価値。「ふれあい」とも密なります。幼い時に手にした「紙の本」を子どもにも手渡したい、という親心は変わらないようです。

電子化の準備は整っていますが、絵本に対するニーズは、今も紙なのです。出版をコンテンツ産業ととらえれば、「子ども」を対象にした異業種企業とのタイアップなど、業にも積極的にビジネスは膨らみます。

――「読者」との関係をどのように見ておられますか。

絵本文化が浸透し、優れた書き手も増えましたが、「プロダクトアウトの出版」にしてはいけないと思っています。お客様の潜在ニーズを実現するための価値観を共有するようにしています。

本に入れている「愛読者はがき」を返してくださった お子さんの誕生日には、バースデーカードをお贈りしています。はがきを寄せてくださったお客様のメッセージは、私どもの宝物です。

――「平和」をテーマにした作品を大切にされている印象があります。

斎藤佐次郎が台東区（旧浅草区）の現住所に社を置いたのは1936（昭和11）年。東京大空襲で台東区は焼け野原になりましたが、弊社は疎開を免れ、この地で仕事を続けることができた。佐次郎も、旧国民学校3年で終戦を迎えた父もこのことを重く受け止めて、「戦災の記憶を風化させてはいけない」という使命感で社業に臨んでいたようです。

「この地で」という感謝の気持ちは、私にもあります。地元、鳥越神社の御祭礼に毎年参加しています。氏子の皆さんと、心を一つにします。

――今回の展覧会は、新しいビジネス展開への布石とも位置づけておられますか。

いいえ、とてもそんなことは。「100年の笑顔、夢 100年先の未来も」というキャッチフレーズのもと、100年間の感謝の気持ちを形にしたかっただけです。会場も地元の上野にこだわりました。手作りの展覧会。開けた時にちゃんとできているのかと、ハラハラしながら、「金の星社らしいよね」と楽しんでいます。

「金の船」が生まれた「童話劇及童話音楽会」の記念写真。後列右より野口雨情、作曲家・中山晋平、本居長世、斎藤佐次郎。前列右より2人目は長世の長女みどり＝1920年11月、丸の内倶楽部で

あすから開催

ロングセラーから近年の人気作などの原画、戦火をのがれた貴重な資料など約160点を紹介します。会期中、地元台東区「鳥越神社」の祭りと、そこに集う人々の姿を切り取った小林伸一郎氏の写真展「鳥越NOW」を同時開催します。

<会 期>7月19日(金)～28日(日) 午前10時～午後5時（19日のみ正午～午後5時）
<会 場>上野の森美術館（東京都台東区上野公園1の2）
<入場料>一般500円、中学～大学生300円、小学生以下無料
<問い合わせ>金の星社 (03・3861・1861 https://www.kinnohoshi.co.jp)
主催 金の星社、毎日新聞社
協力 北区飛鳥山博物館、田端文士村記念館、野口雨情記念館、ちひろ美術館、図書印刷

人気作家らよみきかせ

会期中、人気絵本作家によるイベントを会場で開催します。

7月20日（土） みやにしたつやさん
21日（日） 室井滋さん＆長谷川義史さん
27日（土） 鈴木まもるさん
28日（日） 中川ひろたかさん＆本田洋一郎さん

絵本のよみきかせ、トークショー、ワークショップ、絵本ライブなど作家の皆さんごとに中身が変わります。いずれも午後2時スタート。観覧会入場券とイベント整理券が必要。整理券は当日午前10時から配布し、定員になり次第終了します。当日会場で著者本を購入された先着100人の方は、著者のサイン会に参加いただけます。イベントは都合により中止される場合があります。

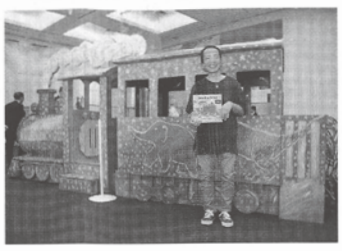
金の星社 おかげさまで100th

2019.7.18 毎日新聞

「みる よむ あそぶ 金の船・金の星 子どもの本100年展」

金の星社 創業100周年記念

右から斎藤、設楽、高井、近藤、丸山の各氏



鈴木さんが着色した巨大ダンボール列車

金の星社は創業100周年を記念し、東京・台東区の上野の森美術館で7月19日から28日まで、「みる よむ あそぶ 金の船・金の星 子どもの本の100年展」を開催した。

上野の森美術館で

開催初日の19日には記念イベントが開かれ、同社・斎藤健司社長、全国学校図書館協議会・設楽敬一代表理事、紀伊國屋書店・高井昌史社長、トーハン・近藤敏貴社長、毎日新聞社・丸山昌宏社長の5人がテープカットを行った。

金の星社は1919年（大正8年）、童謡童話雑誌『金の船』（のちに『金の星』）の刊行により創業され、ベストセラー『かわいそうなぞう』などを出版。創業記念事業の100年展では、日本近代児童文学をリードしてきた同社の貴重な資料や、人気絵本の原画など約160点を展示した。

そのほかにも絵本作家・鈴木まもるさんが二日かけて着色した「せんろはつづく」をモチーフにした巨大ダンボール列車が設置され、ワークショップや作家イベントも開かれた。

激変期の時代 しなやかに適応

開幕セレモニーのあいさつで、斎藤社長は「出版を取り巻く環境は今、まさに激変期にある。その中にあって金の星社は変化にしなやかに適応し、時代に変容しながら生き残っていく決意だ。それとともに子どもたちの心を豊かにし、その成長の糧となる良書の出版という創業以来の基本姿勢は変わらない」と強調。

そのうえで、「これまでの100年は創業者である斎藤佐次郎に始まり、今に続く先人たちのたゆまぬ努力の結果だ。これからの100年も、従業員一同が心を新たに、常にお客の立場で考えるという価値観を共有し、さらなる社業の発展に尽くしていく」と意気込んだ。

2019.7.29 文化通信

出版クラブだより

子どもの本100年 子ども達のために

斎藤 健司

金の船

2019.8.1
学校図書館
速報版8月1日号

子どもたちの「今」を見つめて 創業100年、思いを受け継ぐ

こども・本 この人に聞く

Interview

斎藤 健司さん （㈱金の星社 代表取締役社長）

今年で創業100年を迎えた、児童図書出版社の金の星社。7月19日から28日まで開催された「みる よむ あそぶ 金の船・金の星 子どもの本の100年展」の会場で、斎藤健司社長に創業100年の今の思いなど、お話をうかがった。

『創業当時の活動は、すごくアグレッシブでしたね。雑誌は投稿のスタイルで、そこで募った『読友』のために童謡の音楽会や童話劇を行うなど、まだ20代の若い業者なのによくそこまで、と感心します。今、まさにそうした活動をすべきと、自戒を込めて思っています。

100年展オープニングの日、斎藤さんは薄鼠色の枠な着流し姿で登場された。台東区の鳥越神社氏子十八ケ町睦会の羽織とのこと。下町の地元に根差して営みを続ける同社ならではの心意気が伝わる。

まずは、改めて100年を振り返ってのお気持ちをうかがった。

『創業当時に思いを寄して、勉強し直すという感じでした。祖父である創業者の斎藤佐次郎が亡くなったとき、私は18歳で、もうそれなりに物事がわかる年齢でしたから、創業当時のことを詳しく聞いておけばよかったと心残りです』。

佐次郎氏は、人力車の幌に用いる防水帆布を扱う商家に生まれ育つが、家業には興味を示さず、子どもの本に情熱を注ぎ、金の星社（創業時はキンノツノ社）を立ち上げた。

斎藤さんは幼いころ、佐次郎氏に連れられて、祖母の実家である新潟にしばしば行ったという。

『祖父は、孫に対しては優しいおじいちゃんでしたね。でも新潟に行っても、祖父はずっと原稿のチェックなどをしていて、"ケン坊、そこに本があるから読んでいなさい"、といつも言われました』。

そこには、今回展示されているような古い本、出版したばかりの本など、たくさんの本があった。

『当時、江戸川乱歩の漫画もあり、田舎の古い家で読むのはとても怖いのですが、興味をもって読んでいました。そんな中で、本に対する関心が、自然に培われていったような気がします』。

祖父佐次郎氏、父雅一氏の後を受け、いつか自分が金の星社を継ぐ、ということも、いつの間にか宿命として感じるようになっていったという。

大学卒業後、すぐに金の星社で働くのではなく、修業のため商商に入社。バブル期真っただ中で、船は飛ぶように売れ、休みもなく全国を飛びまわった。

『いわゆるブラック企業でしたが、家業を継ぐよりは楽だと思えるくらい、当時はかなりプレッシャーを感じていました。三代目は身上つぶす、と世の中で言われてますしね。3年の約束でしたが、5年いてしまいました』。

金の星社に入ってからは、他企業での経験を活かし、製作や販売など改革を行っていった。現代の子に合わせ、本の文字を大きく読みやすくしたのもその一つという。

『金の星社は、今の子どもたちや社会が抱えている問題に向き合って、それをあぶり出すということを、代々力を入れてやってきています。子どもたちが身近に感じられるテーマに伝えたいことを盛り込みながら伝えていくのが、児童図書出版社の使命ではないかと思って、本作りをしています』。

「金の船」第1号（1919年発行）

2019.7.24
新聞之新聞

子どもの心を豊かに 良書の出版と普及

金の星社100周年

創業100周年迎える金の星社

読み継がれる名作多数

1000店舗で記念フェア開催

「平和の大切さを子どもたちに」 斎藤社長

2019.8.8 新文化

出版クラブだより

全出版人大会終了

お礼と収支報告

2019.8.20
出版クラブだより